

ジェームズ・デニーの生涯と神学一(七)

松浦義夫

序論

ジェームズ・デニーの神学的著作のうち、彼のいわば三部作とも呼ぶべき、『神学研究』(Studies in Theology)、『キリストの死』(The Death of Christ)、『イエスと福音』(Jesus and the Gospel)の最初の著作にあたる、『神学研究』により、彼の神学の調査に着手し、すでにその第二章「イエスによる自己証言」までを見て来たわけであるが、この第二章と、これに続く第三章とは、デニーの「キリスト論」を理解するうえで、重要な資料を提供してくれる個所である。

ジェームズ・デニーの「キリスト論」を理解するうえで、よりまとまった型の著作としては、先述の三部作の最後の作品である『イエスと福音』が掲げられる。結局、『神学研究』と『イエスと福音』によって、デ

ニーの「キリスト論」を理解することができる、といえるわけである。

『神学研究』が出版されたのは、一八九四年であり、『イエスと福音』が出版されたのは、一九〇八年のことであった。この一五年間の間に、ジェームズ・デニーの生涯において起った、大きな変化といえば、それまで「自由教会」の牧師として在職して来た、ブルーティーフエリーの教会を辞し、一八九七年にグラスゴーにある「自由教会神学校」の、「組織神学」を担当する教授として、同校卒業生としては初めて教壇に立つこととなったことと、彼の恩師でもあり、ブルーティーフエリーの教会における前任者でもあった、A・B・ブルース(A. B. Bruce)の死後、師の後継者として、「新約神学」を担当する教授となった、ということが指摘されよう。なお、これと同時に、デニーの後の「組織神

「学」の担当教授には、ジェームズ・オアー(Oakes Ort)が選任されている。オアー自身は、一九一三年まで、「組織神学」を担当するが、デニーは、その後「新約神学」を担当することによって生涯を終えている。やはりジェームズ・デニーは、神学者としては、「組織神学」よりも、聖書神学、特に「新約神学」を、彼自身のライフワークと見做していた、というように理解できよう。そのような彼の神学的著作のうち、『神学研究』は、いわば最も「組織神学的」とでも呼べる著作であるわけだが、これにしても、見方によっては、「新約神学」に属する著作と見做せなくもない作品である。特に、今我々が取り扱っている、第一章、第三章、すなわち「キリスト論」に関する箇所においては、「新約神学」と呼ぶ方が、よりその性格を示している、と認められる。

先述のように、ジェームズ・デニーは、彼自身の「キリスト論」を『神学研究』と、後の著作『イエスと福音』において論じているわけであるが、この両著作における論述の仕方には、かなりの変更の跡が認められる。両著作に共通する点は、『新約聖書』の本文の釈義を中心に論じているということであるが、両著作の論述の仕方の変更という点に関して、具体的に示

すと、次のようなことになる。

『神学研究』においては、その第二章において、イエス自身の「自己理解」を中心にしつつ、いわば史的イエスの「自己証言」としての「キリスト論」を論じ、続く第三章において、これを受け継ぎ展開させた型での、初代教会の「使徒たち」の証言に基づく「キリスト論」を論じるという順序を採用している。このことによつて、初代教会の「キリスト論」が生前のイエス、すなわち「史的イエス」自身の「自己理解」としての「キリスト論」に溯るものであり、そこに根拠を持つものであることを、歴史的経過に従つて論じたものといえる、いわば、「下からのキリスト論」、あるいは「上昇型キリスト論」、とも呼ぶべき論証の仕方である。これに対して、『イエスと福音』においては、初代教会の様々な型の「キリスト論」、いわば信仰告白としての「キリスト論」から、歴史的に溯り、「史的イエス」の「自己理解」としての「キリスト論」へと論述を進めて行く、いわば「上からのキリスト論」あるいは「下降型キリスト論」といふべき論証の仕方を採用している。こちらの方では、後に『新約聖書』として「正典化」されるようになった諸文書を、その著作年代に従つて論述する仕方を採用している。

『神学研究』において採用された論述の仕方によると、「史的イエス」が「宣教されたキリスト」と展開していく、イエスからキリストへの移行と統一の経過がよく理解でき、『イエスと福音』において採用された論述の仕方によると、初代教会の「信仰告白」が、「史的イエス」にまで遡るといふ事実と、現在の我々自身の「信仰告白」がいかにあるべきか、という課題に対する理解を深めることができる、という利点が認められる。

ところで、ジェームズ・デニーが、『神学研究』および『イエスと福音』を著した時代、すなわち、一八九〇年代から一九一〇年代にかけては、スコットランド出身の代表的神学者とも呼ぶべき、四人の神学者が、それぞれに特色のある「キリスト論」に関する著作を著している。この四人の神学者のうちの一人が、ジェームズ・デニーその人であるが、他の三人の神学者の著作と、彼自身の著作を比較することにより、より一層ジェームズ・デニー自身の「キリスト論」の持つ特色が明らかになる。その四人の神学者とは、具体的には、長老派教会を代表する、ジェームズ・デニー自身と、もう一人の人物、ヒュー・ロス・マッキントッシュ (Hugh Ross Mackintosh) の二人。デニーはグラス

ゴー、マッキントッシュはエディンバラにおいてそれぞれ活動した。残る二人は共に、会衆派教会を代表し、しかもスコットランドにおけるよりも、むしろイングランドでの活動を中心とした、アンドリュー・マーティン・フェアバン (Andrew Martin Fairbairn) と、ピーター・テイラー・フォーサイス (Peter Taylor Forsyth) である。フェアバンは、オックスフォードのマンسفールド・カレッジにおいて、フォーサイスは、ロンドンのハックニー・カレッジ後にロンドン・ユニヴァーシティで活動している。

この四人の神学者の著した、「キリスト論」に関する著作を、年代順にあげ、それぞれの特色を短く指摘するとすれば、以下のようなになる。まず最初にあげられるのは、フェアバンが一八九三年に著した、『近代神学におけるキリストの位置』(The Place of Christ in Modern Theology) である。この著作において、著者は、ジョン・ヘンリー・ニューマンの「教義発展論」との対話ないし対決という立場で、「キリスト論」と「キリストの体なる教会」という意味での「教会論」を、歴史神学的に、発展ないし展開として認識し、それが、初代教会の「キリスト論」および、「教会論」とどうつながり発展したかを、歴史的経過

に従って論じている。これに続くのが、一八九四年にデニーの著した『神学研究』の第二章、第三章の「キリスト論」である。この著作において、デニーは、フェアベアンの上記の著作に度々言及していることから理解できるように、フェアベアンの影響が強く認められる。これに続くのが、同じくデニーの『イエスと福音』である。この著作においては、デニーの特色が強く前面に出た論述となっている。これに続くのが、一年後すなわち一九〇九年に著された、フォーサイスによる『イエス・キリストの人格及び位置』(The Person and Place of Jesus Christ)である。この著作は、

デニーの著作『キリストの死』とともに、かつては必読の書といわれた著作であるが、「信仰と礼拝の対象」としてのイエス・キリストについて、「組織神学」の分野での「キリスト論」としての重要な著作である。そして最後に掲げられるのが、マッキントッシュが一九一二年に著した『キリストの人格に関する教義』(The Doctrine of the Person of Christ)である。この著作は、デニーの『イエスと福音』およびフォーサイスの『イエス・キリストの人格および位置』を前提とし、『新約聖書』に始まり、一九世紀に至る、重要な「キリスト論」を、いわば「教理史」的に扱った前

半部分と、マッキントッシュ自身の「キリスト論」を論じた、「組織神学」的に扱った後半部分とからなる著作である。

これらの四人の神学者のそれぞれの著作の特色からわかるように、ジェームズ・デニーは、もっぱら『新約聖書』の本文の釈義に集中することによって、彼の「キリスト論」を論ずる、という点に彼の姿勢を見ることができよう。

最近、すなわちマッキントッシュの著作が出版されて、約八〇年後の一九九一年に、自身もスコットランド出身である、現代の神学者ジョン・マッコリー(John Maguarrie)が、『現代思想におけるイエス・キリスト』(Jesus Christ in Modern Thought)という著作を著し、Winner of the Collins Religious Book Awardを与えられたが、この著作は、まさにマッキントッシュの著作の現代版とも呼ぶべき著作であることから理解できるように、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて活躍した、これら四人のスコットランド出身の神学者の影響は、英語圏の神学者の著作を語る時には、無視してはならないという感を深くするものである。

ところで、このマッコリーの著作の中で引用され

ている、マルティン・ヘンゲルの次のような表現は、
ジェームズ・デニーが、なぜ『新約聖書』に集中して、
彼の「キリスト論」を論じたのかという理由を知るた
めの重要なヒントを与えてくれるのではないだろうか。
ヘンゲルによると、「(キリスト論の分野において)こ
れら二〇年以内において(すなわち、パウロの手紙が
書かれたA・D四五年から六〇年代にかけて)起った
ことからには、その後七〇〇年間に起こったこと以上
のものが認められる。……事実、古代教会における教
義の形成は、基本的には、この最も初期の二〇年間と
いう間にすでに展開された教義の展開を、考えられる
限りにおいて、発展させ、完成にまで導いた結果以上
のものなのかどうかと、もう一度問いなおしてみるこ
とさえ可能である、と考える人々もある」^(註二) すなわ
ち、「キリスト論」の分野においても、いわゆる「正
統的教義」が確立するまでの、古代教会における教義
の定式化の営みも、実のところ、原始教会の最初の二
〇年間あまりという短期間に、すでに決定されていた
教義を、考えられる限り明確に、定式化ないし公式表
明化させた営みにしか過ぎない、といっても過言では
ない、ということである。そのように考えると、ジェー
ムズ・デニーが、『新約聖書』の本文の釈義に集中し

て、「キリスト論」を著したのも、『新約聖書』がキリ
スト教会における、神学的営みの方向を決定づける、
教会の最も初期の信仰告白を記録した、唯一の資料と
見做しているからにはほかならない、ということになろ
う。別の表現でいえば、『新約聖書』によって示され
た「キリスト論」が本質的にまた実質的に、キリスト
教会の「キリスト論」と言いうるのであり、後の時代
の「キリスト論」は、その時代時代において、その時
代の言葉で、この『新約聖書』によって示された「キ
リスト論」を言い直したものに過ぎないということに
なる、というように理解したのであらうと考えられる。

第一章 使徒的キリスト論

我々は、すでに『神学研究』の第二章の調査により、
史的イエス自身の「自己理解」を通じて、「キリスト
論」の出发点ともいふべき姿を求めて来たわけである
が、ジェームズ・デニーは、続く第三章において、こ
のイエス自身の「自己理解」を受けて、「使徒」と呼
ばれる人々が、これをどのように展開し、それぞれの
「キリスト論」を主張するようになったのかという点
に関して、論述を進めている。先述のように、『イエ

スと福音』においては、より詳細な釈義が記されているので、場合によっては『イエスと福音』からの論述で補いつつ、デニーの考える「使徒的キリスト論」に関して、我々の調査を進めていくことにする。

第三章において、デニーは、まず冒頭において、この章全体の論述の方向性、意義などを指摘することから、論を進めている。^{三二}

「キリスト論における基盤とも呼ぶべき事柄は、キリスト自身による自己証言である。すなわち、神の子、人の子、キリストまた審判者としての自己認識においてだけでなく、彼自身の行為と言葉すべてにおいて、さらには彼の苦難と死において、我々が見出すことのできる、証言である。この事柄に我々が出会うためには、『福音書』の記述にまで溯り、さらに、可能なかぎり直接的に、キリスト自身と接触を持たなければならぬ。今現に、我々の面前に生きており、活動している存在としての彼自身が、我々に対して迫ってくる印象、これこそが我々の出発点でなければならぬ。もし我々がここにおいて何ら心に迫るものを感じないとすれば、また何らかの意味で、彼の特異性さらには彼の神的威厳といったものを、我々が発見できないとするならば、これ以外のやり方で彼に近づいていこう

と我々が試みても、無駄なことである。しかし、この点から出発し、さらに、彼だけが持っている偉大さという事柄に関しての、何らかの印象を受けとめたとして、次におこる当然の疑問は、このような印象を受けとめた我々の心は、それだけで安んじているわけにはいかず、さらに、なぜそうなったのかの説明を求めずにはいられないのではないか、ということである。次のような姿勢は、リッチルおよびその学派の人々によって、唯一の正当な姿勢であるというように想定されているだけではなく、主張もされているものである。彼らの表現をかりて言えば、キリストは、キリスト者の意識にとつて、神としての宗教的価値を持つ存在である。我々が神について言及する時に、我々が本当に意味しているすべての事柄は、そのもっとも純粋な型としては、キリストの人間としての生涯の中において見出されるべきである。それに対していろいろ説明を求めるといふのは、完全な誤りである。そのようにすることによって、精神は誤った位置におかれ、宗教から離れ、神学からさえ離れてしまい、形而上学に変えられてしまうことになる。そうすることにより、倫理的また精神的確かさの領域から、何らの確かさも得られないような、超越的存在の領域へと、宗教を移してし

まうことになる。神学における、不毛な非倫理的机上の空論に飽き飽きしている人々にとっては、このような主張は、何か拍手したくなるような、また魅力を感じてしまうような何かを持っている。しかし、これは人間の心が、永久にそのまま承認し続けておられないような主張でもある。神としての宗教的価値を持つというような、驚くべき人間としての一個の存在、というような現象に対して、我々は、その説明を求めずにはおられない。一方においては神に対して、また一方においては人間たちに対して、そのような排他的ともいえる位置に立つ一個の人間としての彼と、この両者すなわち神および我々人間たちは、どのような関係にあるのかを、規定するという試みを、我々はなさないではいられない。特に我々がキリストの歴史的重要性の大きさを考慮する時には、すなわち、彼以前の世界の歴史を締めくくる役割を持つ存在であるとの自己主張、またその結果として、来たるべき時代を審く存在であるとの彼の自己主張を考慮する時には、我々は、これらの事柄を考慮しつつ、我々の神と人との関する、世界と歴史に関するすべての思想の枠組みの中に、彼の人間としての人格を持つ宗教的価値を、評価し位置づけようと試みなければならぬ。

以上述べたことが、『新約聖書』の著者たちが様々な方法で実行した事柄であり、この章で論じようとしているのは、彼ら著者たちのキリストに対する解釈についてである。まずすべての出発点に位置する事柄としては、イエスの復活と高挙が指摘できる。この事柄を、先を照らし出す偉大なる光ともいふべき事実として、ここから先へと彼ら全員が進んでいく。単にキリストの地上での生活をのみ記録することに従事しているのではないかぎり、『新約聖書』の著者の内、一人として、キリストをかつて地上で生きていた人物として思いえがく者はいない。彼らはすべて、彼すなわちキリストのことを、今も生きて働き、全宇宙の王座に座し、天使と諸力を足下に従え君臨する存在として思いえがいている。栄光の内にある彼の主権は、彼の地上での生涯を、神の啓示としての価値を有するものだとする宗教的評価に、好きかってに付加することもできれば、付加しないでもおられる、というようなものではない。これこそが、『新約聖書』に対するキリスト教的認識の、徹頭徹尾支配的な要素である。もちろんこの事柄は、復活に対する信仰如何に依存している。もし弟子たちが、イエスが三日目に死人の中より甦ったと信じなかったとすれば、キリスト教信仰も、『新

『約聖書』が示しているような姿では、存在しなかったであろう。しかし、復活に対する信仰によって、少なくともある点において、決定的に、あまりにも多くの者たちが除外できればしたいと企てている、あの超越的要素が、キリスト教信仰に持ち込まれるのである。

このようなわけで、筆者が言及した学派の人たちからは、この要素が、明らかにさまにか密かにかはいざ知らず、拒否されているのである。リツチル、ハルナック、ヴェントのような著者たちは、単にそれを無視するだけでなく、そのような点に関しては、はたして信頼できるイエス自身から出た言葉であるのか、使徒たちによってイエスの口を通して語らせられた、ユダヤ教にありふれた言葉なのか、区別することはできないという理由で、それらの要素を拒否するだけにとどまらず、それと共に、キリスト自身の教えの中にある、終末論的諸要素をもすべて拒否してしまうのである。第一歩がこのように気まぐれなら、その次に起こることは、同じように気まぐれで、正当化できないようなやり方となっている。このようにして歩みはじめると、あとはある立場へと歩を進めることとなる。その立場に立てば、『新約聖書』のキリスト論は、キリスト教信仰に無関係なものとなり、要するに、不合理なものとなる。

したがって、良きキリスト者としての我々の務めは、そのような要素を説明したり、理解したり、受け入れるというようなことではなく、単にどうでもよいと説明して片付けてしまうことである。筆者は何をもまた誰をも攻撃したり、擁護したりする意図を持っていない。ただ、『新約聖書』の筆者たちが出発した点から、筆者も出発し、彼らがすべての者の主として崇める一人格についての、彼らの持つ概念を解き明かそうという意図を持っているにすぎないのである。我々にとつてと同様に、彼らにとつても、イエスは、すでに地上にある時点より、神と独一的関係を持つ存在であった。すなわち、父により愛された御子、彼のみが彼以外の者たちに、父を啓示することのできた存在であった。我々にとつてと同様、彼らにとつても、彼こそは、十字架の出来事の後、神により独一的に立証された存在、神の右に挙げられた存在であった。彼らが、これら二つの出来事一つに結びつけ、これらの出来事に心をめぐらした時、彼らは、直観的に、それ以上の事柄が包含されていると感じ取ったのである。人としての生活を送っていた、あの年月において、あのように排他的に神との緊密な関係にあった彼が、あの悲惨な死を遂げた後、その神によって、あのように

排他的に高められたからには、彼こそは本来的に、排他的な方式で、神から由来する存在であったにちがいないはずである。この事柄に関する、ある種の宗教的あるいは信仰的認識であっても、筆者の意図する内容には到達しないようなものも、勿論存在する。人は、キリストの生涯に関して云々することもよかるう。これに関する説明は、ただ一つしか存在しない。神に由来する生涯である。しかし、こう言っただけでは充分ではない。すべての良き生涯は、神に由来するものである。そして、ここにおいて説明されるべき事柄は、キリストが他者と共有するような性質の事柄ではなく、そこには、彼はただ一人位置を占めているような事柄なのである。この位置に立ち、彼はただ彼にのみ排他的にあてはまる自己認識を持ち、他の誰もなし得ない事柄を実行し、そこにおいては、彼が全ての事柄の目標であり到達点である未来を先取りし、復活において宇宙の王座に高举されたように、彼は一人でそこに立っているのである。使徒的著者たちは、次のような観点において一致している。すなわち、現在ではキリストの神性と呼ばれている事柄には、ある超越的要素が含まれている、ということである。言葉を換えて言えば、彼らは、ただ単に、人なるキリスト・イエスが、彼と

出会った人々にとって、神としての宗教的価値を持つと信じるだけではなく、彼の地上における出現の背後には、かつてモーゼに対して啓示された、偉大なる神の属性が、その恵みと真理の満ち満ちた型をとって表われたものを見、神との必然的また超越的關係が存在すると信じるのである。彼らは、彼すなわちイエスの地上への出現を、一人の受肉者としての性質を持つものであると見る点で、意見が一致している。彼は、人類によって神に献げられた、一人の聖者ではない。彼は、御父よりこの世に來たった、御子である。筆者が、このように述べると、あたかも使徒たちが、甦りの主を信じる信仰にとってどうしても必要なものとして、他に何の支えもなく、単に頭で考え出した、あるいは、知的格闘によって手に入れたたぐいの、仮説について述べているように聞こえるかもしれないが、筆者は、事實はまったく逆であると信じる。我々が、この事柄について、どのように認識するにしても、神の靈による導きが確かに与えられたのであり、それによって、あの危機的時代にある彼ら『新約聖書』の筆者たちは、自らに与えられた義務である、後の全ての時代にまで受け継がれるべき、教会の精神を形成するという務めを果たすことが出来たのである。パウロ自身も、繰り

返し語っているように、彼は彼の福音を啓示により受けたものであり、この福音の内には、キリストに対する彼の認識も含まれていることは確かと思われるが、この事実のゆえに、彼のキリスト論に対して、単なる知的構築に対して与えられるのに優る権威が与えられるのである。新しい宗教の霊が、そこにあった。御父と御子よりの聖霊であった。そして、根本的な点において、それはキリスト自身の言葉に溯るものである。

以上かなり長く、ジェームズ・デニー自身の言葉を引用したが、ここで指摘されているのは、次のような事柄であろう。すなわち、「使徒的証言」の出発点には、「高挙」の状態にある「主」としてのキリスト、今も生き王座にあり、すべてを支配し導き、我々に臨む姿としてのキリストが立っている、ということである。すなわち、過去の歴史的一人格としてのイエスとしてではなく、今も生きている「主なるキリスト」である。そしてこのキリストが、いわゆる「神としての宗教的価値」を持つと言い得る根拠を、「使徒」と呼ばれる人々が、証言しようと務めている、ということである。そして、その契機として、「復活」、「受肉」、さらには後ほど論じられる「先在」へと溯って行くわけである。しかも、これら「使徒的証言」の導きとして、

彼ら「使徒」と呼ばれた人々の、知的格闘ということよりも、それらを超えたところで働く、「神の霊」すなわち「聖霊」の働きを認めることを主張しているわけである。そして、それに止まらず、この導きを、キリスト自身の言葉に溯ることができる、と主張しているわけである。

「高挙」および「復活」に関する、「使徒的証言」についての具体的釈義等は、『神学研究』よりも、『イエスと福音』において、詳細に述べられているので、さらに稿を改めて論述することにする。(次号に続く)

注(一)Macquarrie, J. Jesus Christ in Modern Thought. p49, London, 1991.

(二)Denney, J. Studies in Theology, p47, London, 1904.